

北陸の豪雪

サッと降っては止みサッと降っては止む時雨がいつしかミズレに変わり雪となる。屋根を激しく打つアラレの音で目を覚ました初冬の朝、ゴロと鳴った「発雷」に追い討ちを駆けられて冬の訪れを知る。

いよいよ本格的な雪の季節となる北陸地方はこの緯度としては世界に類を見ない平野部での豪雪地帯である。昭和二十年、三十八年豪雪、五十六年豪雪と十八年毎に大豪雪が繰り返えされてきたが、暖冬続きですっかり忘れた存在となっている。

日本海に対馬暖流が流れ、その上をユーラシア大陸からの寒気の氾濫による冷たい季節風が吹きだし、雪雲が発生して日本海側の地方に大雪をもたらす。

なぜ北陸地方に豪雪なのか」と問われれば、暖流と寒気の氾濫、上空の寒冷渦に加えて、朝鮮半島のつけねの白頭山を中心とした山塊とヒマラヤ山脈・チベット高原がそこに

あるからと答える。

大雪の時のひまわりの写真を見ると、白頭山の山塊の風下側に北陸地方まで伸びた長大な活発な雪雲の帯が見られる。ある時は積乱雲の列、あるときは渦状の雲となり北西の流れに乗って押し寄せてきている。この雪雲の帯の長期の停滞こそが豪雪の元凶である。

寒気を大陸奥地で長期間滞留させてるのがヒマラヤやチベットの役割で、寒波として送り出すのが、地球をめぐる偏西風の蛇行である。

これだけの役者が揃った歴史は浅い。最終氷河期が終わって気温が上がり、海面が上昇して対馬暖流が日本海に本格的に流れ込んだのが、今から八千五百年ほど前。現在の氣候に近く微妙な豪雪の条件が満たされて始めてきたのが二千年前頃からだろう。

ユーラシア大陸の地形の影響と海と空の条件が、大陸の東縁にある日本列島の一点である北陸地方を目指したように集中して雪を降らせる。その宿命的な結果が北陸の豪雪であ

る。山を削ればと夢想したがそれも許されないだろう。